

	学位記	文科省報告
2004	3960	甲 ②1938

北方狩猟・漁撈民の考古学

山浦 清

論文概要書

はじめに

本書は、筆者が発表してきた論文・報告のうち、北方狩猟民、特に北方海獣狩猟民、あるいは北方系漁撈民とされる人々についての考古学論考を収録したものである。その際、要旨に変更はないが、理解を容易にするため、書き直したところもある。

ここで題名の「北方」という言葉に関し、いささか説明しておく必要がある。本論の対象としている地域のうち、本書第Ⅲ部の北極海を中心とした所謂 circumpolar 地域、すなわち環極北地域については問題とされることはなかろう。ベーリング海峡を中心とするなら、東はアラスカ・カナダ・グリーンランド、西はシベリア北極海岸からスカンジナビア半島に至る地域が該当する。本書第Ⅱ部が対象とする地域は、北太平洋、特にその西岸のオホーツク海を中心とした地域である。当地域にはオホーツク文化に知られるように、海獣狩猟に力点をおいた先史文化が確認されている。こうした地域も「北方」と呼ぶことに、日本考古学において抵抗はなかろう。ただ本書では日本列島をも対象域とし、その諸論考を第Ⅰ部に収録した。列島における漁撈民には、北方系・南方系の二つの要素・潮流が認められるということは、多くの民族学・民俗学さらには日本史研究者も指摘される点である。南方系とされる漁撈活動として想起されるのは「海女」などによる潜水漁であり、北方系とされるものとして、寒流に乗って南下する魚類を対象とした漁撈活動、特に銚頭を使用しての大型表層魚を対象とした漁撈活動や、海棲哺乳動物を対象とした狩猟活動を挙げることができる。そうした狩猟・漁撈民を、民族学者などに習い本書では「北方」・「北方系」の人々と呼んだ次第である。

ところで本書においては、基本的考古資料として回転式銚頭あるいは雌形銚頭に言及することの多い点が特色とされる。従って銚頭についての一般的理解を得るため、その概説的な論考を序章としておくこととした。すなわち下記である。

#### 序章 民族誌にみる銚の構造と機能 エスキモーを中心として

最後に、本書中「エスキモー」という民族名を多用している点に触れておく。近年、日本においては「イヌイット」と言い換えることが多いが、彼等の民族名称に関しては、その居住するアメリカ・カナダ・デンマークあるいはロシアそれぞれにおいて異なっており、本書では原論文のままとしたことを了承願いたい。

それだけでなく農耕民と漁撈民が共生するような村落社会の出現も想定すべき事を説いた。また両論文において、弥生文化の日本列島への広がりが、一般には稲作農耕の広がりとして理解されているが、そうした理解はもちろん大切であるが、そうした広がり  
の背景に漁撈民の活動があり、彼等がその牽引力となったということを指摘した。それは弥生文化イコール農耕文化という理解だけでは不十分であり、弥生文化における漁撈民的文化要素の存在にも注目すべきであるとし、さらには日本文化における漁撈民的文化要素の存在という民俗学者の説くところとも関連する視点である。

第6章・第7章では、豊富な遺物が発見されている古墳時代の洞窟遺跡、具体的には和歌山県田辺市磯間岩陰・千葉県館山市大寺山洞穴・宮城県石巻市五松山洞窟に注目した論考である。それらの洞窟遺跡からは甲冑・刀剣類を含む豊富な副葬品が出土しており、それらは大型前方後円墳に埋葬された隣接地域の地域首長層の副葬品に匹敵するものである。そこから大寺山洞穴被葬者については、5世紀代、ヤマト王権の韓半島への出兵活動に際し、安房地域漁撈民を水軍として組織化し参戦した可能性を指摘した。また600年前後とされる五松山洞窟被葬者に関しては、ヤマト王権あるいは関東地方地域首長層による東北地方への軍事的進出において、水軍としてその先兵的役割を担った可能性を指摘した。

## 第Ⅱ部 環オホーツク海地域という視点から

当該部は、オホーツク海をめぐる諸文化、およびそれらの間の交流・交渉についての次の7章から成っている。

第1章 北サハリン・ハンツーザ貝塚出土遺物について

第2章 ノグリキおよびサドフニキⅡ遺跡出土遺物について

第3章 サハリン・ウスチ=アインスコエ遺蹟採集の考古資料

第4章 オホーツク文化の終焉と擦文文化

第5章 考古学から見た北千島の文化的位置づけ

第6章 鉾頭から見た環オホーツク海域諸文化の接触・交流

第7章 マレクの系統に関する一序説

第1章から第3章はサハリンにおける土器群について触れたものである。第1章・第2章の論文発表当時(1985・86年)においては、旧ソ連領サハリンに渡航すること

は非常に困難であり、鳥居龍造によって 1921 年に採集され、長く東京大学に収蔵されていた資料を中心としてその分析を行った。第 1 章論文においては、鳥居によって北サハリン・ハンツーザ貝塚において採集された資料について触れた。それらの資料分析から、それらの土器がかつて提唱された「恵須取式」として理解すべきものであることを説いた。さらにそれが、オホーツク文化に先行するとされる南サハリン鈴谷式土器と並行する土器群として理解すべきこと、さらにサハリンの鈴谷式土器が、恵須取式土器と、北海道北部における続縄文式土器との折衷的な様相を呈することを指摘した。

第 2 章では、鳥居氏によってもたらされた北サハリン・ノグリキ遺跡採集品について触れるとともに、筆者が 1985 年サハリン墓参団に参加することで入手できたサハリン郷土博物館出版物をもとに、第二次世界大戦前に日本考古学者によって宗仁式とされた土器群の分析を行った。ノグリキ遺跡出土品に関していうなら、それらがアムール川流域から報告されている新石器時代時との関連で理解すべきことを説いた。また宗仁式については、北海道縄文時代早期の土器との関連を指摘した。

第 3 章では、筆者自身が 1991 年サハリン中部で採集した資料を紹介しながら、オホーツク文化初頭とされる十和田式土器出現の一要素として、サルゴリ文化の土器にその可能性があることを触れている。

第 4 章では、オホーツク文化終末期の土器とされたトビニタイ式土器について論述したものである。それがオホーツク式土器と擦文式土器との融合型式とされているが、そうした土器出現の契機として、本州から北海道への鉄器流入量の増加、そうした交易の反対給付としての毛皮などへの需要増大が、擦文文化人のオホーツク海岸部への進出、オホーツク文化と擦文文化の融合を生み出し、トビニタイ式土器の出現を見ることとなったことを説いた。

第 5 章では、北海道とカムチャッカ半島との間に列なる千島列島先史文化について論述したものである。特に北千島においては断面三角形の石斧、ラブレットなどカムチャッカ半島からの文化要素とされるものが存在することは確かである。さらに北千島のオホーツク文化とされるものはオホーツク文化ではなく、カムチャッカ系統の文化であるとする研究者も存在する。しかしそれは北海道から渡ったオホーツク文化人の北千島への適応の結果、そうした地域性が生じたと説いた。さらにオホーツク文化以後、擦文文化以降における北海道からの強い文化的影響を指摘し、最終的にはアイ

又民族のカムチャッカ半島南端部への進出を指摘した。

第6・7章では環オホーツク海的な広がりを見せる文化要素に注目した。第6章は、オホーツク海北岸、マガダン周辺部から近年報告されるようになったトカレフ文化の銚頭に注目した論考である。トカレフ文化に関しては、その土器の形態・文様、さらには放射性炭素測定年代結果から、オホーツク文化に並行する時期のものであり、その実態は未だ不明であるが、それらの中間地域たとえばアムール下流域に存在した母文化からそれぞれの地域に波及したものと理解し、そうした理解を銚頭の系統から追求した。すなわち銚頭の属性分析から、サハリンから北海道オホーツク海岸部、千島列島、さらにはカムチャッカ半島に至る流れと、サハリンからオホーツク海北岸さらにカムチャッカ半島へ至る流れが存在することを指摘した。

第7章は、アイヌのサケ・マス漁用漁撈具として最もよく知られるマレクを取り上げた。マレクに関しては環オホーツク海的な分布することは知られていたが、それらの関係については不明であった。筆者はそれらの名称を蒐集する中から、それらが marek 系と elgu 系という2系統に分かれることを明らかにした。前者は北海道から千島列島を通り、カムチャッカ半島に至るものであり、後者はアムール川流域からオホーツク海北岸を経てカムチャッカ半島へ至る広がりを示している。こうした広がり、さらには考古学的調査結果を考慮するなら、あるいはオホーツク・トカレフ両文化の母文化において成立し、そこからオホーツク海の南北海岸部へ広がった可能性を指摘した。

### 第Ⅲ部 環極北地域という視点から

当該部には次の8論文が含まれている。

- 第1章 アラスカにおける漁撈文化の展開 海獣狩猟を中心として
- 第2章 ベーリング海峡周辺地域への鉄器の流入
- 第3章 ベーリング海峡周辺における回転式銚頭の発展過程について
- 第4章 アラスカ・クリギタヴィク出土の回転式銚頭について
- 第5章 テューレ文化の成立とその広がり
- 第6章 カリフォルニア発見の回転式銚頭
- 第7章 アムール河中流域で発見されたエスキモーの回転式銚頭

## 第8章 ヨーロッパ先史時代の回転式銚頭

第1章から第5章までは「エスキモー考古学」とされる分野の論文であり、エスキモー民族文化史に関する考古学的研究である。第6章・第7章はエスキモーとその南方地域との関係について触れ、第8章ではヨーロッパでの極北地方と南方地域との関係について論述している。

第1章はアラスカを中心としながら、アメリカ大陸極北地域での、漁撈文化の展開と海獣狩猟文化成立過程について、通史的に述べたものである。その際、極北地域海岸部での通年的居住が可能となるには海獣狩猟技術が必要とされること、さらにそのためには回転式銚頭使用が必須であることを説き、その出現時期は、現在の調査段階では紀元前2000年紀段階に遡るとした。さらにエスキモー文化において一般に知られる捕鯨に関しては、その組織的捕鯨の成立をテューレ文化中葉以後、紀元後2000年紀に入ってからとした。

第2章においては、ベーリング海峡周辺部への鉄器の流入が、紀元前後と考えられる事を指摘した。それ以前において既に回転式銚頭の製作が開始されていたが、鉄器の流入により、豊かな装飾を持った、複雑・多様な銚頭の出現を促すこととなった。またそうした鉄器の流入量増加は、ベーリング海峡周辺部とシベリア諸民族との間、さらにはエスキモー地域諸集団間の交易の活発化によるものであり、同時に交易をめぐる社会的緊張を生み出し、時に地域間の「戦争」状況をも生み出すこととなった。さらにそれは第5章で説くテューレ文化のカナダ・グリーンランドへの東遷の一要因となった可能性を説いた。

第3章は、ベーリング海峡周辺部の初期エスキモー先史文化として研究史上指摘されている主要文化の回転式銚頭を型式学的に整理し、そこからそれら文化間の関係を説いたものである。すなわちアメリカ・カナダ・ロシア・デンマークなどの研究者によって、それら諸文化の理解に混乱が認められていた。そうした点から、問題となる諸文化の主要銚頭を全て実測・紹介し、そこから諸文化の銚頭を型式学的に整理しつつ、銚頭間の関係、さらには諸文化間の関係を明確にしたものである。

第4章はアラスカ・セワード半島に存在するクリギタヴィック遺跡出土の銚頭を紹介するとともに、エスキモー先史文化におけるその位置付けを試みた。当資料はコリンズ博士によって1936年調査されたものである。その一部は博士によって紹介されていたが、そのほとんどは未報告であった。本論では博士の許可を得て、その回転式

銚頭全てを実測図・写真で紹介すると共にその系統を論じた。結論として、テューレ文化成立においてアジア側のプヌーク文化の影響が大きいことを指摘し、テューレ文化の東遷においてプヌーク文化の動向を考慮する必要が有ることを説いたものである。近年において、アメリカの考古学研究者も本論の主張に注目するようになってきている。

第5章では、多くの研究者によって説かれてきたテューレ文化のアラスカからカナダ・グリーンランドへの紀元後1000年前後における東遷を対象としている。ただし本論の特徴は、銚頭の詳細な分析から、その東遷がどのようになされたかを明らかにしたものである。その結果、それまでの研究者が説くように、その東遷は漸移的なものではなく、急激な形での移動がなされたことを説いた。それはまた、以前から説かれるような気候温暖化と言った要因からだけでは、その移動を説明することは不十分であるとした。当論考発表時においては、上記第2章で説いたような交易を、その要因として考慮すべきであるとは指摘しておらず、単にシベリアでの民族移動を含む「事件」といったものを考える必要が有ることを指摘したに止まった。ただしこうした気候変動要因説に対する反対意見は、その後のアメリカ・カナダの研究者間においても受け入れるところとなってきている。

第6・7章においては、既に触れたように極北地域と南方地域との関連である。第6章ではカリフォルニア沖の小島サンニコラス島から発見されたエスキモーの銚頭を紹介し、その由来を説いたものである。それはロシアの国策会社であった露米会社がラッコ猟のため、アラスカ南部に住むエスキモーを18世紀末から19世紀初頭にかけて強制的にカリフォルニアに移住させて猟をおこなわせたことを示す考古資料である。本論では、当銚頭が南西アラスカにおける銚頭の伝統線上にあることを示した。またこうした民族動向は日本北方史と無関係でなく、そうしたカリフォルニアへの露米会社進出政策の中心人物が、1804年から5年、長崎に国交交渉に来たレザノフであった。またラッコ猟のためアラスカ南部先住民が、千島列島へ同様に強制移住させられた事実も、こうした流れのなかで理解すべき事を指摘した。

第7章はアムール川中流域で近年発見されたエスキモー銚頭を紹介し、その意味するところを説いた一文である。それらの銚頭は紀元後1000年紀中葉とされる古ベーリング海文化に属するものである。それらは、その他の牙類と共に発見されたようであるが、アムール川中流域でのそうした発見の背景として、第2章で説いたような

ベーリング海峡域へ流入する鉄器の対価として、一般に説かれる毛皮類ばかりでなく、中国内部での牙製品への需要、象牙代替品としてのセイウチ牙・マンモス牙への需要があったのではないかと指摘した。こうした主張は、既にアメリカの東洋学者ラウファーが文献の上からも説いていた説に対応するものである。

第 8 章はヨーロッパ先史時代に知られる回転式銚頭を集成したものである。当該域においては新石器時代以後、スカンジナビア半島を中心とした極北地域と、ドナウ川から黒海に地域といった二地域に回転式銚頭の存在が確認される。前者は海獣猟を中心としたものであるのに対し、後者は大型魚、特にチョウザメ漁用と考えられる。こうした両極的広がりユーラシア大陸東端部においても想定でき、ベーリング海峡周辺部と日本を含む極東地域という二地域である。またアムール川流域における回転式銚頭の存在も、チョウザメ漁用と推測することも可能である。ただしヨーロッパにおいてはその南部地域では海獣猟がなされなかったが、極東地域においては大型魚ばかりではなく、海獣猟にも使用されたという点が異なるとされよう。しかしながら、こうしたユーラシア大陸東西縁辺部における漁撈民の比較研究は、氷河期以降における農耕社会の出現とその展開とは異なる人類の多様化、漁撈民の出現とその展開を考えるうえで興味深い比較考古学的視点となる可能性の有ることを説いた。

以上